

英國人記者が見た 連合国戦勝史観の虚妄

「日本は戦争犯罪国家」論を
信じて疑わなかつた
ベテラン

評判の
歴史の嘘が
見抜けると、
ズストセラフ！

祥伝社新書

英國人記者が見た

ヘンリー・S・ストークス

英國人記者が見た 連合国戦勝史観の虚妄 ヘンリー・S・ストークス

祥伝
社新書

351



9784396113513



1920221008007

ISBN978-4-396-11351-3
C0221 ¥800E

定価：本体800円+税



H.S. Stokes

1938年英国生まれ。61年オックスフォード大学修士課程修了後、62年フィナンシャル・タイムズ社入社。64年東京支局初代支局長、67年ザ・タイムズ東京支局長を歴任。三島由紀夫と最も親しかった外国人記者としても知られる。著書に『三島由紀夫生と死』(徳間書店)、『なぜアメリカは、対日戦争を仕掛けたのか』(祥伝社新書、加瀬英明氏との共著)。

英國の知性が見た、日本の戦後(本書の目次)

- 第1章 故郷イギリスで見たアメリカ軍の戦車
- 第2章 日本だけが戦争犯罪国家なのか
- 第3章 三島由紀夫が死を賭して問うたもの
- 第4章 橋下市長の記者会見と慰安婦問題
- 第5章 蔣介石、毛沢東も否定した「南京大虐殺」
- 第6章 『英靈の聲』とは何だったか
- 第7章 日本はアジアの希望の光
- 第8章 私が会ったアジアのリーダーたち
- 第9章 私の心に残る人々
- 終 章 日本人は日本を見直そう

第五章 蔣介石、毛澤東も否定した「南京大虐殺」

情報戦争における謀略宣伝^{プロパガンダ}だった「南京」

日本外国特派員協会では、そのときどきの話題の本の著者を招いて講演してもらっている。「ブック・ブレイク」と呼ばれている。

南京事件について『南京事件』の探求（文春新書、二〇〇一年刊）を書いた、北村立命館大学教授に来てもらつたことがあつた。

京都から通訳を連れてやつてきてもらつても、特派員協会が負担をするわけではない。すべて自前だ。

ジャーナリストは、つねに懷疑心を持つている。疑う能力が頗みで、他に何の特技を持つていない。ジャーナリストは、そのように訓練されている。事実を目にするまで、信じない。

私は北村教授の講話を聞いて、「南京大虐殺事件」について、はじめて事実に目を開くようになつた。それまでは、日本軍が南京で大虐殺を行なつたという、アメリカや、ヨーロッパにおける通説を、信じ込んでいた。

以来、私なりに時間を割いて「南京事件」について、研究を始めた。日本の大新聞の記者や、大学教授や、外務省の幹部職員まで、多くの者が「南京大虐殺」が行なわれたとい

う、旧戦勝国の宣伝をいまだに信じている。

私は歴史学者でも、南京問題の専門家でもない。だが、明らかに言えることは、「南京大虐殺」というものが、情報戦争における謀略宣伝^{プロパガンダ}だということだ。

その背後には、中国版のCIAが暗躍していた。中国の情報機関は、イギリスの日刊紙『マンチエスター・ガーディアン』中国特派員のH・J・ティンパリーと、密接な関係を持つていた。

ティンパリーは『ホワット・ウォー・ミーンズ（戦争とは何か）』と題する本を著して、南京での出来事を造り上げ、ニューヨークとロンドンで出版した。この著作は当時、西洋知識人社会を震撼させた。「ジャーナリストが現地の様子を目の当たりにした衝撃から書いた、客観的なルポ」として受け取られた。いまでは国民党中央宣傳部という中国国民党の情報機関がその内容に、深く関与していたことが、明らかになつている。

ティンパリーの本は、レフト・ブック・クラブから出版された。この「左翼書籍俱楽部」は、北村教授の調査によると、一九三六年に発足した左翼知識人団体で、その背後にはイギリス共産党やコミニテルンがあつたという。

るが、それによれば、「盧溝橋事件後に国民党政府により欧米に派遣され宣伝工作に従事、続いて国民党中央宣伝部顧問に就任した」と書かれている。

また、『中国国民党新聞政策之研究』の「南京事件」という項目には、次のような詳細な説明もある。

「日本軍の南京大虐殺の悪行が世界を震撼させた時、國際宣伝処は直に當時南京にいた英國の『マンチエスター・ガーディアン』の記者のティンパーリーとアメリカの教授のスマイスに宣伝刊行物『日軍暴行紀実』と『南京戰禍寫真』を書いてもらい、この両書は一躍有名になつたという。このように中国人自身は顔を出さずに手当を支払う等の方法で、『我が抗戦の真相と政策を理解する國際友人に我々の代言人となつてもらう』という曲線的宣伝手法は、國際宣伝処が戦時最も常用した技巧の一つであり効果が著しかった」

北村教授は國際宣伝処長の曾虚白が、ティンパーリーとの関係について言及している事実を、紹介している。

「ティンパーリーは都合のよいことに、我々が上海で抗日國際宣伝を展開していた時に上海の『抗戦委員会』に参加していた三人の重要人物のうちの一人であつた」

「彼が（南京から）上海に到着すると、我々は直に彼と連絡をとつた。そして彼に香港から飛行機で漢口（南京陥落後の国民党政府所在地）に来てもらい、直接に会つて全てを相談した。我々は目下の國際宣伝において中国人は絶対に顔を出すべきではなく、我々の抗戦の真相と政策を理解する國際友人を捜して我々の代弁者になつてもらわねばならないと決定した。ティンパーリーは理想の人選であつた。かくして我々は手始めに、金を使ってティンパーリー本人とティンパーリー経由でスマイスに依頼して、日本軍の南京大虐殺の目撃記録として二冊の本を書いてもらい、印刷して発行することを決定した」

このように、南京大虐殺を同時代の世界に発信した最も重要な英文資料は、中国版 CIAによって工作されていた。工作活動が大規模であつたことも、曾虚白の説明で裏付けられる。

つてもらうことになり、トランス・パシフィック・ニュースサービスの名のもとにアメリカでニュースを流すことを決定した。同時に、アール・リーフがニューヨークの事務を、ヘンリー・エヴァンスがシカゴの事務を、マルコム・ロシュルトがサンフランシスコの事務を取り仕切ることになった。これらの人々はみな経験を有するアメリカの記者であった

曾虚白はアメリカに宣伝の重点をおいたが、トランス・パシフィック・ニュースサービス駐在事務所の名で、ロンドンでも宣伝活動を組織的に実行した。

つまり初めから、「南京大虐殺」は中国国民党政府によるプロ・パガンダであつた。ティンペーリーは中国国民党政府の工作員ながらの活動を、展開した。

北村教授の本のポイントは、さまざまな西洋人が中国版CIAと深く関わっていたということだ。中国のプロ・パガンダ組織は、その活動を通して、西洋人を利用できると自信を深めた。

ティンペーリーが中国情報機関からも金を貰つていたことは、間違いないが、初めたいどくくらい貰つていたのかは、明らかになつてない。

北村教授の本によると、ティンペーリーは、犠牲者数として「三〇〇万人」という数字を

本国へ伝えた。いつたい、この「三〇〇万」という数字は、どこからきたのだろう。北村教授は中国の情報機関がティンペーリーを通じて、世界に発信したとしている。

一九三八年初頭で、中国の情報機関が十分に整備されていなかつたが、ティンペーリーの働きは絶大で、中国の情報機関も驚愕し、味を占めた。

日本人は野蛮な民族だと、宣伝することに成功した。中国人は天使であるかのように位置づけられた。プロ・パガンダは大成功だつた。

中央宣伝部に取り込まれた南京の欧米人たち

「南京事件」の専門家として、東中野修道亞細亞大学教授もよく知られている。東中野教授が著した『南京事件 国民党極秘文書から読み解く』（草思社）も、驚愕の事実を明るみに晒している。

中央宣伝部の宣伝工作概要は「各国新聞記者と連絡して、彼らを使ってわが抗戦宣伝とする」として「われわれが発表した宣伝文書を外国人記者が発表すれば、最も直接的な効果があるが、しかしそのためには彼らの信頼を得て初めてわれわれの利用できるところとなる。この工作は実に面倒で難しいが、決して疎かにしてはならない」と記している。

国際宣伝処が中国に駐在する各国の新聞記者、外国公館の武官や、ニュース専門委員を集めて開いた記者会見は、一九三七年十二月から一ヵ月で三〇〇回を数え、外国特派員および外国駐在公館職員の参加は、毎回平均三五人だった。ところが、この三〇〇回にわかつた記者会見で、国際宣伝処が「虐殺」に言及したことは、一度もなかつた。

宣伝工作概要の報告によると、記者たちは報道について検閲を受けていた。

「あらゆる電報は初級検査を受けたのち、問題がなければ、検査者が本処（国際宣伝処）の『検査済みパス』のスタンプを押し、電信局へ送つて発信する。もし取消しがある場合は『〇〇の字を取消してパス』のスタンプか、或いは『全文取消』のスタンプを押す。……」

外国特派員は中央宣伝部の検閲を受け、結果的に協力したか、積極的に協力したのだった。

一九三七年十一月七日に、南京に国際委員会が、設立された。非戦闘員を保護する目的で安全地帯をつくるためだつた。十一月二十二日に、ジョン・ラーベが代表に推された。

国際委員会への工作活動も、徹底していた。ラーベはドイツのシーメンス社南京支社長だつた。時を同じくして、中央宣伝部がお茶会を始めた。二十三のことだつた。ラーベは「日記」にこう書いている。

「十七時。前の外交部長（外務大臣）で現在は国民党中央政治委員会秘書長の張群氏邸でティーパーティー。約五十人のアメリカ人やヨーロッパ人の他に出席していたのは次の各氏だ。防衛軍司令官唐生智、首都警察庁長官王固盤、南京市長馬超俊。『いい考え』があるということだつた。なんでも、われわれ後に残つたヨーロッパ人やアメリカ人が、毎晩八時から九時に国際連合^{クレブ}で落ちあい、そこで中国人指導者もしくはその代理人と接触できるというのである」

国際連合は、中国人と外国人が交流するために国民党政府が運営した。そこには各国大使館代表、ビジネスマン、宣教師、外国特派員が約五〇名集い、毎日夜の八時半から九時半まで、防衛軍、警察庁、南京市の代表と会見した。

中央宣伝部はこうした特権を与え、検閲を巧みに使って、外国人たちを国民党政府に取

り込んでいった。そのサービスぶりは驚くほどだった。外国人記者などが取材に来ると、外事課が政治、経済、交通、金融、工業、社会一般などさまざまな質問に、それぞれの担当長官に引き合わせ、回答を得られるよう取り計らった。会見は外事課が通訳を担当し、長官に会見相手の略歴と政治傾向を事前に説明し、どこまで話して良いか判断材料まで提供した。外国特派員は、中国シンパとして、すっかり取り込まれていった。

外国人記者たちは、平素は當處（國際宣伝処）が誠心誠意宣伝指導にあたっていることから、そうとうに打ち解けた感情を持つている。そのほとんどはわが国に深い同情を寄せてくれているが、しかし新聞記者は何かを耳にすると必ずそれを記録するという気質を持っているので、噂まで取り上げて打電することにもなりかねない。含蓄をこめた表現で、検査者の注意を巧みに逃れることにも長けている。中国駐在記者が発信した電報を各国の新聞が載せれば、極東情勢に注目している国際人士はそれを重視するものであるから、厳格に綿密に検査する必要がある。妥当性に欠けるものは削除または差し止めにしたうえで、その理由を発信者に説明し、確実に了解を得られるようにして、その誤った観点を糺した

中國四千年の歴史というが、その歴史は日本とまつたくちがつて、万世一系の天皇を戴く王朝の歴史ではない。新たに天命を受けた王朝が、易姓革命によつて、それまでの歴史を抹殺し、四千年にわたつて紡ぎあげて捏造された歴史の連続が、中国史の本質である。その熟練した技が、いかに歴史を創作するか、目の当たりにするようだ。

「南京大虐殺」を世界に最初に報道した記者たち

「南京大虐殺」と称される出来事を最初に世界に報道したのは、南京にいた外国特派員、『ニューヨーク・タイムズ』のテイルマン・ダーディンと、『シカゴ・デイリー・ニューズ』のアーチボルド・スティールの二人だつた。南京陥落後の十二月十五日、二人は電気が停まつた南京から上海へ向かつた。日本軍による南京攻略戦の記事を送るためだつた。『シカゴ・デイリー・ニューズ』は十五日に、「南京大虐殺物語」との見出しで、トップの扱いでこのニュースを報じた。

「外国人記者たちは、平素は當處（國際宣伝処）が誠心誠意宣伝指導にあたっていることから、そうとうに打ち解けた感情を持つている。そのほとんどはわが国に深い同情を寄せてくれているが、しかし新聞記者は何かを耳にすると必ずそれを記録するという気質を持っているので、噂まで取り上げて打電することにもなりかねない。含蓄をこめた表現で、検査者の注意を巧みに逃れることにも長けている。中国駐在記者が発信した電報を各国の新聞が載せれば、極東情勢に注目している国際人士はそれを重視するものであるから、厳格に綿密に検査する必要がある。妥当性に欠けるものは削除または差し止めにしたうえ宣伝処は細心の注意を払っていた。そのことが、宣伝工作概要から読み取れる。

「南京の包囲と攻略を最もふさわしい言葉で表現するならば『地獄の四日間』ということになろう。……南京陥落の物語は、落とし穴に落ちた中国軍の言語に絶する混乱とパニックと、征服軍による恐怖の支配の物語である。何千人の生命が犠牲となつたが、多くは罪のない人たちであった。……それは羊を殺すようであった。……以上の記述は包囲中の南京に残つた私自身や他の外国人による目撃にもとづくものである」

ダーディン記者の記事は、『ニューヨーク・タイムズ』に十八日に掲載された。

「南京における大規模な虐殺と蛮行により……殺人が頻発し、大規模な掠奪、婦女暴行、非戦闘員の殺害……南京は恐怖の町と化した。……恐れや興奮から走る者は誰もが即座に殺されたようだ。……多くの殺人が外国人たちに目撃された」

「多くは罪のない人たちであつた」とか「非戦闘員の殺害」という表現は、あたかも一般市民の虐殺があつたような印象を与える。もしそういう事実があつたのであれば、重大な

国際法違反であり、大量の民間人を殺害したのならば「大虐殺」の誹りはまぬがれない。

一九三八年七月、イギリスの日刊紙『マンチエスター・ガーディアン』中国特派員のティンパーリーが、『ホワット・ウォード・ミーンズ（戦争とは何か）』という本を出版したことにについては、先に述べた。

この本は、南京陥落前後に現地において、その一部始終を見たという匿名のアメリカ人の手紙や、備忘録メモシングダムをまとめて、南京における日本軍の殺人、強姦、掠奪、放火を告発したも

のだ。

この本の評価がいつそう高まつたのは、その後、匿名の執筆者が国際委員会のメンバーで南京大学教授であり、南京の著名な宣教師として人望のあつたマイナー・ベイツと、やはり国際委員会のメンバーで宣教師のジョージ・フィッチ師であると判明したことについた。ベイツは東京裁判にも出廷し、日本軍の虐殺を主張した。

国民党中央宣伝部国際宣伝処長の曾虚白がティンパーリーに、「お金を使って頼んで、本を書いてもらい、それを印刷して出版した」と証言していると前述したが、ベイツとフィッチも第三者ではなかつた。

ベイツは国民党政府「顧問」であり、フィッチは妻が蔣介石夫人の宋美齡の親友だつ

た。

ベイツは「その本（『戦争とは何か』）には、十二月十五日に南京を離れようとしていたさまざまな特派員に利用してもらおうと、私が同日に準備した声明が掲載されている」と述べている。その特派員はスティール、ダーデインなどであり、ベイツが渡した「声明」とは次のようなものである。

「（日本軍による南京陥落後）一日もすると、たび重なる殺人、大規模で半ば計画的な略奪、婦女暴行をも含む家庭生活の勝手きわまる妨害などによって、事態の見通しはすっかり暗くなってしまった。市内を見まわった外国人は、このとき、通りには市民の死体が多数ころがっていたと報告していた。……死亡した市民の大部分は、十三日の午後と夜、つまり日本軍が侵入してきたときに射殺されたり、銃剣で突き刺されたりしたものだった。……元中国軍として日本軍によつて引き出された数組の男たちは、数珠つなぎに縛りあげられて射殺された。これらの兵士たちは武器を捨てており、軍服さえ脱ぎ捨てていた者もいた。……南京で示されているこの身の毛もよだつような状態は……」

誰一人として殺人を目撃していない不思議

しかしこうした記述は、国際委員会が南京の不祥事を日本大使館に届けた『市民重大被害報告』(Daily Report of the Serious Injuries to Civilians) の内容と、まったく相容れない。

『市民重大被害報告』は、ルイス・スマイス南京大学社会学部教授によつて一九三八年二月にまとめられた。全四四四件中の一二三件がティンパリーの著した『戦争とは何か』の付録に収録され、その後に蒋介石の軍事委員会に直属する国際問題研究所の監修で『南京安全地帯の記録』として一九三九年夏に英文で出版された。それによると南京陥落後の三日間の被害届は次のとおりとなる。

「十二月十三日～殺人ゼロ件、強姦一件、略奪二件、放火ゼロ件、拉致一件、傷害一件、侵入ゼロ件。

十二月十四日～殺人一件、強姦四件、略奪三件、放火ゼロ件、拉致一件、傷害ゼロ件、侵入一件。

これは日本側による報告ではない。国際委員会が受理した南京市の被害届で、日本大使館へ提出されたものである。補足すると目撃者がいる殺人事件は、南京陥落後三日間でゼロであった。誰一人として殺人を目撃していない。

ベイツは、中央宣伝部の「首都陥落後の敵の暴行を暴く」計画に従つて、「虚構」の報告書を書いたと考えられる。ベイツは聖職者でもあり人望も厚かつたので、ウソをでっち上げるとは、ステイールもダーデインも思つていなかつたのかもしれない。

また二人の特派員にとつては、南京の信頼のにおける人物が目撃した報告として報道したが、その真偽の裏は取らなかつた。ステイールとダーデインは世界で最初に「南京大虐殺」を報道した歴史的榮誉に輝く外国特派員となつたが、東京裁判に出廷した時は「頻発する市民虐殺」を事実として、主張することがなかつた。

このあとも、外国特派員による「南京大虐殺」の報道が続いて、欧米の新聞に載つた。

二月一日に、こうした外国特派員の記事を根拠に、国際連盟で中国代表の顧維鈞が演説して、南京市民が二万人も虐殺されたと言及した。

「南京」が虚構である」との決定的証拠

一九三八年四月に、東京のアメリカ大使館付武官のキャーボット・コーヴィルが調査のために、南京にやつてきた。米国大使館のジョン・アリソン領事などとともに、ベイツなど外国人が集まつて南京の状況を報告した。

コーヴィルは「南京では日本兵の略奪、強姦は数週間続いている。アリソンは大使館再開のため一月六日午前十一時に南京に着いたが、掠奪、強姦はまだ盛んに行なわれていた」と報告している。なぜ、コーヴィルは殺人や虐殺を報告しなかつたのか。ベイツまでいたというのに、一人として市民虐殺をアメリカ大使館付武官のコーヴィルに訴えなかつた。

コーヴィルが「虐殺」を報告しなかつた以上に、もつと摩訶不思議なことがある。

アメリカの新聞記事が「日本軍による虐殺」を想わせる報道をしているにもかかわらず、中央宣伝部は「南京大虐殺」を宣伝材料にして国際社会にアピールをしなかつた。南京陥落の四ヵ月後に中央宣伝部が創刊した『戦時中国』(China at War) の創刊号は、「南京は一九三七年十二月十二日以降、金と略奪品と女を求めて隈なく町を歩き回る日本兵の狩猟場となつた」と報告しただけで、「虐殺」にはまったく触れなかつた。

そもそもベイツもフィッチも、南京城内の安全地帯にいた。前述したように、安全地帯

では「大虐殺」どころか、「殺人」の被害届すらわざかしかなかつた。それも目撃された殺人はゼロだった。いつたい、ベイツやフィッチの描写する「三日間で一万二〇〇〇人の非戦闘員の男女子供の殺人」や「約三万人の兵士の殺害」とは、どこで起こつたことなか。

十一月十五日付のシカゴ・デイリー・ニュースで、ステイール記者は「河岸近くの城壁を背にして、三百人の中国人の一群を整然と処刑している」と報じている。ところが、国民党政府もその中央宣伝部も、日本をいつさい非難していない。

ちなみに日本軍が安全地帯から連行した中国兵は、問題がないかぎり市民として登録された。敗残兵は苦力^{クーリー}—労働者ともなっていた。苦力は好待遇で、月額五円の給料を支給されていた。日本軍の一等兵の本給は、月額五円五〇銭だった。

中央宣伝部がティンパリーに依頼し、製作した宣伝本『戦争とは何か』について、興味深い事実がある。同書は漢訳されて『外人目撃中の日軍暴行』として出版された。

ところが、英文版にあつたベイツが書いた第三章の文章から、次の①と②の二文が削除されていた。

①「埋葬隊はその地点には三千の遺体があつたと報告しているが、それは大量死刑執行の後、そのまま並べられたままか、或いは積み重ねられたまま放置された」

②「埋葬による証拠の示すところでは、四万人近くの非武装の人間が南京城内または城門の付近で殺され、そのうちの約三〇パーセントは、かつて兵隊になつたことのない人である」

中央宣伝部は、英文の読者は海外の外国人であるために、バレないと思つた。しかし漢訳本となると、中国にいる事情通がこうした記述を読んだら、「それは事実ではない」と批判してくるかもしれない。虚偽の宣伝・プロパガンダだと露見してしまう。そこで二文を削除したと考えられる。

中央宣伝部が「四万人虐殺説」を削除したのは理解できるが、さらに重要なのはベイツが「四万人不法処刑説」を主張する文を漢訳版で削除されたことに納得していることだ。もつと驚く事実もある。中央宣伝部国際宣伝処工作概要の中の「対敵諜工作概況」には、この本の要約が掲載された。

「外人目撃中の日軍暴行」——この本は英國記者田伯烈（ティンパーリー）が著した。内容は、敵軍が一九三七年十二月十三日に南京に侵入したとの姦淫、放火、掠奪、要するに極悪非道の行為に触れ、軍紀の退廃および人間性の墮落した状況についても等しく詳細に記載している。

この本は中国語、英語で出版したほか、日本語にも翻訳された。日本語では書名を『戦争とは?』と、改めている。日本語版の冒頭には、日本の左翼運動家、青山和夫の序文があり、なかに暴行の写真が多数ある。

本書は香港、上海、および海外各地で広く売られ、そのうち日本の大本営參謀總長閑院宮が日本軍將兵に告ぐる書を発し、「皇軍」のシナにおける国辱的な行動を認め、訓戒しようとした。

驚くべきことに、この要約には「大虐殺」「虐殺」どころか「殺人」という言葉も出ていない。唯一の理由は、国民党政府も、中央宣伝部も、國際宣伝處も「南京大虐殺」を認めていなかつたということだ。もし「南京大虐殺」が事実であれば、「虐殺」という表現していた。

東中野教授の、南京事件に関する研究は徹底したもので、敬意を表したい。証拠を丹念に調べ、その主張をきわめて論理的に説明して、裏付けている。

さらに加瀬英明氏によれば、蔣介石と毛沢東は南京陥落後に、多くの演説を行なつていいるが、一度も日本軍が南京で虐殺を行なつたことに、言及していないという。このことだけとっても、「南京大虐殺」が虚構であることがわかる。

光州事件の取材体験から言えること

最後に、ジャーナリストとしての私の体験からすると、当時の南京で、本当に何が起つたのかという客観的な事実を把握するのは、きわめて難しいと思う。

一九八〇年五月、韓国で起こった光州事件の現場に、私はいた。

ソウルから車で三時間ほどのところにある全羅南道の道都の光州は、一九七〇年の統計

では、人口五〇万二七五三人だった。

当時、私は『ニューヨーク・タイムズ』東京支局長をしており、光州には取材で入った。私が光州に入ったその日の午後、まず思ったのは、いつたい何人が殺されたのか、その殺された人々がいつどこにいるのか、ということだった。

光州に、多くの外国特派員が入っていた。その時体験したのは、光州ほどの広さの地域だと、武力衝突が起こった時に、いつたい何が起こっているのか、すべてを把握するのはきわめて難しいということだった。

死体がころがっていた。銃声も聞こえる。だが誰が誰を撃っているのか。なぜ銃撃戦となっているのか、わからない。

民衆側を率いている者がいるのか。どの人物なのか。何が起こっているかわかっている人物がいるか。把握するには難しい。

その日と翌日の『ニューヨーク・タイムズ』本社への私の取材報告は、きわめて不十分な内容だった。事件当時、私と欧米の他社の記者は、まったく違うことを書いていた。まったく同じ現場で取材をしても、異なる内容になる。もつとも記者は、違った視点で報じたい。だが、それにしてもだ。

一九八〇年五月に光州で起こったことは、一〇年を経ても、何が起こっていたか明らかにされていなかった。

真実が表に出てきたのは、二〇年も経つてからのことだった。

私は友人のリー・ジェイという韓国記者と、光州に関する共著を、英語で出版した。私も含めて光州事件の現場にいた一〇人の欧米ジャーナリストの報告を取りまとめた。

その体験でわかったのは、一区画離れたところで何が起こっているかも、把握することが難しいということだった。

アメリカの『ボルティモア・サン』紙のブラディー・マーティン記者は、優れた記事を書いていた。彼のネタ元は、軍との戦いを統率していた学生リーダーだった。実は、私はこの男と、男が死んだ日の午後に会っていた。

どのように報じようと、無差別殺人が展開しており、犠牲者の多くは市民だった。軍服を着た者は、一人もいなかった。戦っている者の中には、残酷なギャングのような者もいた。彼らは地元警察の署長や、署員だったが、金大中の支持者だったかもしれない。いまだに判別できない。

たした。「三日間で一万二千人の非戦闘員の男女子供の殺人」や「約三万人の兵士の虐殺」という数字を生み出した。南京陥落の一〇年後に、東京裁判の法廷でも、そのように証言している。われわれもこういう人物に、光州でコンタクトを取つていた。

いつたい、何が起こっているのかを掌握するために、このような人物が重要だと思われるのだ。しかし、いつたい何が起こっていたのか、把握できなかつた。いつたい何人が殺されたのか。その時には、前述の学生リーダーの名前すらわからなかつた。二〇年後になつて、彼の名前がやつとわかつた。

一九三七年の南京で起こつたことも、当時現場にいたジャーナリストが事態を掌握できたはずがないことは、断言することができる。一九三七年夏には、人々が南京から逃げ始めていた。上海戦の敗北を知れば、当然のことだつた。

国際委員会の報告によれば、南京に残つていた人口は、南京戦の時点で二〇万人だつた。しかし、南京が陥落してから人口が増え始め、翌一月には、二五万人に膨れ上がりつた。戦闘が終つて治安が回復されて、人々が南京へと戻つてきたのだ。

このことからも「南京大虐殺」などなかつたことは、明白だ。歴史的事実として「南京大虐殺」は、なかつた。それは、中華民国政府が捏造した、プロパガンダだつた。